

<資料>

『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』 における蒸留業関係記事

渡 辺 邦 博

- I. はじめに
- II. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』1779年9月11日号
- III. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』1779年10月4日号
- IV. 小括

Summary: In this paper, we introduce the two articles on Distillery in the *Edinburgh Evening Courant* for 1779 (no. 95707 Saturday, Sept. 11. 1779 & no. 9517 Monday, Oct. 4, 1779), both of them denied the possibility of a monopoly in distilling, and insisted the merits of great distillers, what was the position as fully discussed by the article of Sept. 27 for 1779.

How James Steuart would have responded to them in the issue of Monday, Oct. 4. 1779, should be examined in my next article.

I. は じ め に

先に私は、1779年段階でのジェイムズ・ステュアート（James Steuart, 1713-1780）による蒸留業関係の論考を考察する必要性を述べ、おそらくは彼の手になると推定される『エディンバラ・イーヴニング・クーラント *Edinburgh Evening Courant*』誌1779年10月4日号の記事が執筆されるきっかけとなったと思われる、『同』誌1779年9月27日号掲載の記事を紹介（本誌、第14巻2号）し、その号に掲載された記事の執筆者はステュアートではない、という結論を示した（同、第14巻3/4合併号）。いささか話の順序が前後するが、本稿では、先に提示した関係記事4点のうち2点を紹介したい。この2点に、先の9月27日号と、最後に検討を加える10月4日号の記事をあわせれば、1779年における『クーラント』の関係記事は、おそらくすべてが網羅されることになるから、この期間については、当該問題をめぐるすべての材料が出揃うことになるのである。

本稿において取り扱われる問題の2つの記事とは、それぞれ9月11日と28日の記事のことである。⁽¹⁾

はじめに、その論調を簡潔に紹介しておこう。

まず、9月11日号に掲載された i) は、大要次のような見解を主張する。

新法の結果、大麦購入者の数が増加し、その者たちは分散して居住するので、協定を結びにくい。もし蒸留業の利潤が、法外なものになれば、他分野からの参入が増加して、利潤は正常に戻る。万が一、独占が成立して、大麦価格が下落しても、農業者の生産調整が行なわれれば、早晩その価格は上昇する。さらに、大規模な蒸留業者は、原料である穀物と燃料の双方の点で節約を行なうので、スピリッツは、税を負担しても、おそらく安価になる。最悪の事態として、大麦がはなはだしく安価となれば、蒸留業と並んでアルコールの製造を行なう醸造業者が、ウィスキーの競争者となって現れ、強いアルコールの消費が減少するという望ましい所産もある。大規模蒸留業者が、混ぜ物をしてアルコールの質をおとすなどということはありえない。

この論説には、以下の一連の記事に一貫して展開される、新立法を前提とした、大規模な蒸留業者に対する警戒論が誤解であるという論点が明瞭に表れているともみなせる。

それに対して、10月4日号所載の iv) の立場は次のようなものである。蒸留業が少数者の手にゆだねられることによって、大麦価格が下落すると言われている。しかし、今年の大麦の価格低下は、現行法が存在しなかったにもかかわらず発生したし、その法の施行の結果、大麦購入者の数は増加したけれども、それが独占を生み出しはしなかった。スコットランドにおけるリカーの供給は、十分な資力をそなえ、税を負担する大規模な蒸留業者によって行なわれるべきなのである。

これは、現行法と大規模蒸留業者擁護論の駄目押しとみることもできる。

残念ながら、この問題の背景についてまだ十分な情報を入手していないので、この新聞紙上に現れた論調と、一般の読者を含むいわゆるスコットランドの世論との関わりについては、ここで詳らかにしえないが、次に節を改めて、2つの論説を紹介しよう。

＜これまでと同じく、原文でイタリクとなっていた個所は、訳文では傍点を付しておいた。また、訳者が補った個所は＜ ＞を付してそれと判るようにしておいた。＞

(1) 渡辺 [2000] にも示したが、念のため、ここで今一度、4つの詳細を記しておこう。

- i) For the EDINBURGH EVENING COURANT, To the PUBLIC. Sept. 5. No. 9507, Saturday, September 11. 1779.
 - ii) For the EDINBURGH EVENING COURANT, To the GENTLEMEN FREEHOLDERS of SCOTLAND, who are soon to be assembled in their Michaelmas Meetings. September 26. NO. 9514, Monday, September 27, 1779.
 - iii) For the EDINBURGH EVENING COURANT, NO. 9517, Monday, October 4, 1779.
 - iv) For the EDINBURGH EVENING COURANT, QUERIES addressed to the GENTLEMEN FREEHOLDERS, of the Counties of Perth, Sterling, &c., September 28, 1779, NO. 9517, Monday, October 4, 1779.
- ii) はすでに渡辺 [1999] で紹介されたものなので、本稿では i) と iv) が対象となる。iv) は、iii) と同じ号に掲載されたのであるが、バハン伯の証言「政府の法案に端を発する不満に示唆を受けた……」(= 9月7日の『クーラント』の8項目の示唆に対応する形で) に対応しないので、バハン伯の言うステュアートの反論とはみなしえない。渡辺 [1999] の2-5ページを参照。

II. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』 1779年9月11日号

『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』に
国民へ

数々の真に迫った叫び声が、人々の心に訴えてはいるが、状況が、わが統治者たちの力を弱めるの十分ではない、このような時に、このようなことにとっては、かりにそのうちのほんのわずかな部分でも取り除き、人心を落ち着かせ、有益ではあるが、とにかく人気のない政府の法律とでも折り合いをつけさせることは、疑いもなく賞賛に値することに違いない。私の考えによれば、蒸留業にかんする最近の諸規制は、こうした性質を持った法律である。このような諸規制について、私が聞いているいくつかの反対論を取り除くことが、以下の書簡の意図である。

私の知る限り、不安を引き起こしているこの法律の主な特徴は、次の2つである。

第一に、危惧されているのは、交易が少数者の手にゆだねられると、独占のありふれた諸結果が発生して、製造業の原料が標準以下の＜不当に安い＞価格で買い取られ、その製品が、途方もない値段で販売されることである。

第二に、懸念されているのは、はるかに高価になるにもかかわらず、スピリッツが、現在製造されているものと、品質の点で、同等ではなくなるということである。

以上のうちの前者については、非常に手間のかかる検討が必要であるが、私が証明したいと希望するのは、独占の発生の見込みはないということだけでなく、万が一あったとしても、一般に憂慮されているような、恐るべき諸結果を伴うことは、決してないということである。

そこで、第一に、大麦を購入する競争者の数が、最近の議会の法律によって、減少することはない。交易は規制を受けるけれども、制限されるわけではない。私の推定では、最近に至るまで、スコットランドを通じてみれば、1000名近くの間が、ウィスキーの蒸留に雇用されていたであろうけれども、そのうちのほとんどひとりも、大麦を買い付ける競争者として、市場に参入するものはなかった。というのも、彼らの貯え＜ストック＞が、この目的にとっては、あまりにもわずかだったからである。彼らにできたことといえば、大麦をめぐる競争者としてただひとり市場に参入した、従来からの麦芽製造人たち＜maltsters＞や醸造業者たちから、彼らの勤労の材料をわずかな量だけ買い入れることであった。このようなことが今なお継続してい

る上に、彼ら＜大麦の購入者＞の数が、小規模な交易人たちの役割を補い、貯えがあるために最初の市場に赴くことができる、第一級の蒸留業者たちによって、増加させられるのだから、その結果、競争者の数が増加させられて、独占の危倦性は、過去にそうであったよりも、実際には少なくなるのである。

そのうえ、減少するはずの実際の競争者の数（私の考えによると、事実ではないが）を考慮すれば、その状況はいつそう独占を防止する方向に向かうであろう。ほとんどの製造業の場合と同様に、彼らが特定の町や地域に集まることはあり得ず、大麦や燃料のように、どうしても必要な材料がかさばる性質を持っているため、彼らは、その国のうちで実に様々な地域に住むようになる。しかし、もしも、居住地が近いこと、排他的特権という不正、さらに組合法の専制などのどれをとっても、町で独占を維持するのにほとんど十分でないとしたら、住居が離れているために結合が困難となり、取るに足りない部分との協定を破るという機会や動機を、たえず熟練者に対して与えることになる人々によって、それ＜独占＞が試みられるのは、何と無駄なことなのだろうか。

さらにもし、どの営業者たちにも、結合しようとする意向と機会があったとしても、独占を確立しようとするかれらの努力は、非常に効果のないものとなる。というのも、すでに見たように、交易は規制を受けるとしても、制限されることはないのだから。蒸留業者たちの利潤が、現在懸念されているように途方もないものとまでなったとしても、彼らが見つめる大麦や、彼らの売りさばくスピリッツの価格を固定するとすれば、そうした利益が異常なら、多数の新たな企業家たちがその分野に参入することになって、その市場があふれるばかりに供給を受け、競争が、蒸留業の利潤を、通常の水準まで引き下げることになる。

最後に、最悪の事態を想定して、独占が確立し、大麦に対する需要が大幅に減少して、その価格が、1 ボル⁽²⁾＜boll＞あたり13から11シリングにまで下落したとすれば、この結果は、一般に想像されるほどには、致命的なものにならない。農業者が最初の年にその損害を受け、市場は供給過剰になるだろうが、その後には、彼の生産物をその需要に釣り合わせるべく一層慎重になる。数多くの種類の農業は、現在大麦の栽培を行なっているだけでなく十分に利益を得ているのであり、小麦とオートミールの毎年の輸入が、このような物品の供給では、その需要に十分ではないことを証明している。おびただしいエーカー数の耕地に適した土地が、毎年のように牧草地に転用されてきたことは、放牧の利潤が、耕作地のそれと並ぶ位であるにしても、まだその最高点にはないということを示している。以上のどの方面においても、農業者は少しも

(2) スコットランドにおける、穀物・果物などの乾量にかんする容積単位。およそ、イングランドの6ブッシェルの相当する。Grant & Murison [1986] を参照。

損することなく土地を利用できるし、大麦の価格は、供給が減少すれば、その現行水準まで、まもなく上昇するであろう。

スピリッツの価格については、蒸留業者による大麦の価格*引き下げのための結合が妨げられたのと同じ諸原因が、その生産物の価格の途方もない割合までの上昇を妨げる。蒸留業者たちが互いに離れていることが、彼らの結合の形成を困難にし、その維持を不可能にするのである。

* この法律が通過して以来、大麦の価格が下落し、スピリッツの価格もかなり上昇した、と言われている。私の信ずるところ、古い穀物がほとんど底をつき、新しいものがまだ市場にもたらされていない、1年のうちのこの季節にあつては、前者は決して異常な状態ではない。どちらの事態も、明らかにまだ存在していてもいない独占に訴えることなく、次のような方法で、おそらくは説明することができる。現在その取引を終了している小規模な蒸留業者たちは、この不足に気が付いて、農業者たちと取引の打診を行なっている麦芽製造人たちに対して、それ以上の需要を形成していない。＜それに対して＞大規模蒸留業者たちと言え、まだ買い付けを開始していない。つまり、一方が市場を放棄しているのに、まだ他方がそこに入っていないのである。小規模な蒸留業者たちは、それ以上の活動を禁じられているのだから、彼らがすでに製造したあるだけのスピリッツのほとんどを利用しようと努めるであろう。つまり、彼らは、それらを、できるだけ高く売ろうとする。これに、あわよくば議会の法律に非難を投げかけようと言う願望の上に、自分たちの目先の利益に対する見通しが加わるのだから、彼らが、事態についてあらゆる責めを負わなくてはならない。かくして、取引の停滞が予測される短期においては、古い経路が満たされ、新しいそれはまだ生成されていないのだから、ある程度の不都合が察知されても、それは後になるまで識別されない。

さらに、新たな競争者たちが毎日のように出現し、穏当な利潤によって満足しているのだから、その者たちが交易全体を独占するか、その敵対者たちに、その価格の引き下げを強制することになる。必要な貯え＜ストック＞は、競争を妨げるほど大きなものでは決してない。必要な原材料を買い付けるのに要するのが、1500ポンドか、その10倍の額であるとすれば、もしその利潤が、他の交易における通常の比率をほんの僅かだけでも上回るならば、15000ポンドは、さまざまな人によって、この新たな交易の部門に、すぐに振り向けられる。

いや、以上のような新規制は、スピリッツの価格を引き上げるのではなく、私の確信するところ、一つの正反対の効果を持つ。15ポンドの貯えによって自らの生計を立てなければならぬ人は、1500ポンドまたは15000ポンドの貯えで商売を営む人に比べれば、実に法外な利潤を必要とするに違いない。彼らの生活様式が、極めて異なったものとなるのは確かであるが、ほとんどこの程度のものにはとどまらない。

さらに、この貯えという点で有利に立てば、ひとは、はるかに安価であるだけでなく、ずっ

と良質の穀物を買うことができる。すなわち、彼らは、最初の市場に赴き、かくして、最悪の穀物だけを最高の値段で提供する麦芽製造人や醸造業者たちが、小規模蒸留業者たちから取り上げた利潤を、蓄えることができる。

現行の規制の場合にはまた、燃料という項目でかなりの節約が行われる。つまり、500ガロンの蒸留所を操業させる場合には、10ガロンのものを50操業させる場合に比べると、燃料の浪費は、確かにほかに少ないからである。

以上の最後の2つの品目＜穀物と燃料＞における節約は、相当なもののように思われるので、私の確信するところ、それは租税の追加的支出を相殺してあまりあり、賦課があるにもかかわらず、彼ら＜大蒸留業者＞のスピリッツは、従来通り安価に、おそらくは販売されるであろう。

しかし、これまでの場合のように、最悪のことを認めて、その結果がどうなるのかを検討してみよう。大麦がかなり安いところまで低下し、スピリッツの価格が法外な高さまで上昇したとすれば、ありがたいことに、どんな議会の法律によっても、われわれが望む以上に大麦＜価格＞を騰貴させたり、現在われわれが楽しむのを超えてたくさんのウィスキーを飲むことはできない。これまでに示されたことではあるが、利益ということを教訓として、農業者はすぐに自分の生産物をその現在の需要に比例させ、そのことによって、大麦は適切にもその現在の高さにまで引き上げられる。そして、同様の行為によってウィスキーが、穏当な価格になるわけである。もしも大麦＜の価格＞がはなはだしく低下すれば、蒸留業者がその安さの利益を手に入れる以上、醸造業者も少なくとも同じだけは購入することになって、醸造業者はそのエールの価格を引き下げるか、あるいは同じ価格だとしても、品質のいっそう優れた物からそれ＜エール＞を製造することができる。この品質の優位と、価格の安さということが、知らず知らずのうちにその税を増加させるので、その結果、われわれは、有害で、なおかつ（ハイランドの族長たちよ、お許しあれ）口に合わないリカーを、もっと安くて、健康によく、口あたりのよいそれと、取り替えることができることになる。さらに、全体として、貧しい蒸留業者たちは、まず最初に同情されるべきである。というのも、彼らが一方のものに妥当な価値をよこんで提供したり、他方のものに対する穏当な価格をすすんで受け入れないのなら、われわれは、彼にまったく大麦を売らず、彼らのウィスキーを少しも買わないという力を持っているのであるから。||

|| 私はこれまで、独占のあらゆる危険を取り除くのにそれだけで十分な、輸出や輸入という明白な方策について、これまでまったく言及してこなかった。われわれが、外国で大麦をまったく値引きしないで売ることができるというのに、いったい全体なぜ、われわれは、国内で自国のそれを、半額で売らなければならないのか。あるいは、われわれが、同じ代価で、素晴らしいラム酒を手に入

れることができる場合に、どうしてわれわれは、いまわしいウィスキー1ガロンあたりに、7シリングもの支払いをしなければならないのだろうか。

この法律に対して提出された、第二の反対論については、それが明らかにあまりに根拠のないものなので、気がひけて、その表立った評価に立ち入ることができない。

大規模な蒸留所を適切に経営することは、小規模な蒸留所のそれに劣らず困難なことである。つまり、＜蒸留缶の＞頭部を冷たく保つためには、同じ慎重さが必要でなければならないが、水の供給が可能なところなら、どちらの場合であっても、これは等しく容易なことである。さらに、私はそれが申し述べられるのを耳にしたけれども、良識ある人なら、大規模な蒸留業者の方が、小規模なそれよりも、自分のスピリッツに混ぜ物をする傾向が大きいなどと、主張するだろうか。それは、財力があり人格に優れた人が、貧しく、食に事欠いている人であれば持ち合わせている、軽蔑に値する利益のため、みずからの職業や世評を、あえて危険にさらすということに等しいではないか。

それでは、これまで私が利用してきた、いくつかの議論を手短かに数え上げることによって、このくどくどしい書簡を締めくくりにしたい。

第一に、最近の法律のために、大麦の価格が下落することはない。というのも、それによって、実際の購入者の数が増加することはあっても、減少することはないのだから。

第二に、蒸留業者たちが、結合することによって、その買い入れる大麦や、その販売するスピリッツに対する価格を、固定するのではないかと恐れられているけれども、彼らが互いに離れ離れとなっていることのために、全体として結合が妨げられるし、それが形成されたとしても、すぐに分離が引き起こされるのは確実なのである。

第三に、交易が開かれておれば、その利潤が法外なものとなっても、新たな競争者たちが毎日そこに参入し、その競争相手が、この交易の諸利潤を、それ以外の交易における通常の利潤率のところまで、まもなく落ち着かせるのである。

第四に、独占が成立したとしても、その不都合は、ほんのわずかな間しか続かないだろう。というのも、農業者たちの間でほんの少しでも警告があったり、彼らの顧客たちの中にほんのわずかでも堅実な面があれば、蒸留業者たちは、合理的な値段で、一方から買い、他方に売るように、まもなくなくなるだろうからである。

第五に、貯えと運営の方法が優れているため、大規模な蒸留業者たちは、わずかな利潤で、つまり小さな蒸留業者たちよりも、高く買って安く売っても、商売がやって行けるのである。

第六に、その地位と人格とがあるために、彼らは、自分たちのスピリッツに混ぜ物をするという誘惑を免れる。というのも、薬屋から薬品を買うと言って、ペテン師から毒薬を買い入れたりしない人なら誰でも、まじめに正反対のことを主張はできないだろうからである。

9月5日

H……

III. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』

1779年10月4日号（1779年9月28日付け）

『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』に

パース、スターリングなどの諸州のジェントルマン・フリーホルダーに持ち込まれた質問

「民間の蒸留業者たちによる不正を、より効果的に防止するための」議会による最近の法律に反対する、あなた方の真の動機とは何なのか。

人々は、本当に公平無私で、公共心を持っているのだろうか。それとも、あなた方が、自分本位の考えや、大衆の叫び声によって、影響を受けているのだろうか。

その法律に対して、あなた方が反対するのが正当であるかどうかは、それがイングランドでも等しく効力をを持つけれども、その国では、それに反対する不平がたった一言も出ていないし、スコットランドにおいても、北方のほんのわずかな諸州から出されているのに過ぎないということが分かれば、少なくとも、非常に疑わしいことではないのだろうか。

法律が成立して3か月もたたず、その現実的諸効果にかんする公平な判断も、かなり確実なものとしては、おそらく形成されてもいないのに、その諸結果を想像することによって、なんであれ法律の撤回や変更を試みるというのは、この上もなく、早まったことではないのか。

この法律によって、内閣は、この国に利益を与え、収入の増加を図ろうとしたと、あなた方は信ずるのか、それとも、この国を疲弊させ、収入を減少させようとした、と考えるのだろうか。

このような時にあっては、紳士諸君、あなた方にとって、政府の権力を強化することと、立法府の法律について、好意的でない考えを支持したり、吹きこんだりすることによって、国民

のうちの下層の階級の胸のうちに、支配者たちに対する、根も葉もない嫉妬や不満をかき立てることの、どちらの方が、いちばん適切なことなのだろうか。

この法律のひとつの大きな目標が、弱いワインやスピリッツ類に対する税から生ずる収入を増加させることであったとすれば、さらに、すべてではないにしても、民間の蒸留業者の方策によって、国家が毎年のように、だまし取られてきた大きな金額（40000ポンド以下ではない）の少なくともかなりの部分についてであったとすれば、これをもって、その意図に対抗して、あなた方が歩を踏み出す、絶好の時期であると解するのか、それとも、大蔵大臣が、あなた方の申し出を、受け入れる可能性があるとか、きっとそれに耳を傾けるに違いない、と考えるのだろうか。

しかし、あなた方の提案には、蒸留所の規模に比例した金額を支払いさえすれば、どのような規模の蒸留所であっても、民間用＜自家用＞の使用はもちろん、販売を目的とした蒸留所をすすんで行なう人なら誰に対しても、免許を与えるということが言われているが、いったいあなた方は、この制限のない寛容の帰結について、とことんまで、お考えになったことがあるのだろうか。

小規模な蒸留所を、非合法ではあったが、これまでは幅広く利用することによって、社会や諸個人に生じてきた、とりわけ大都市において久しく声高に不平がもらされてきた、数々の損害について、あなた方はおぼえておいででしょう。さらにまた、このような害悪は、その業務が法に適っていると申告されるならば、訂正されるし、有害な免許やくだらない作文といったものによらないあらゆる調査によって、取り除かれるということを、理解しておいででしょう。

行状の正しくないご婦人方のために、売春宿や女郎屋に免許を与えることを提案するのに比べれば、（有害ではないにしても）害のある1つの商品を、安すぎる価格で醸造して販売している、二千から三千もの数からなる、社会のうちに、貧しく値打ちがない点ではこの上もない部分に、もしもあなた方が、免許を与えるならば、発生する不幸な結果は、はるかに少ないという確信でもおありなのだろうか。

しかも、紳士諸君、あなた方が反対しようとする、この法律を真剣に考え、それが、この問題について、どの点で従来の法律と異なるのかを、考えたことがおありだろうか。

それが導入されたことによる唯一の重大な変更とは、民間＜自家用＞の使用に認められる、蒸留所の規模の縮小が、10から2ガロンの容量になる、ということにあるのではないのか。

従来は、10ガロンを超える蒸留所でも、自家用というふれ込みで、誰にせよ蒸留を行うことは合法であったが、それなら、現在2ガロン以上の蒸留所で蒸留することも同様に不法ではないのではないか。

さらに、10ガロン以下であっても、小規模な蒸留所で、販売なり報酬を目的として、これまで蒸留を行なった人は誰でも、不法ではなかったのではないのか。

それでは、蒸留所の規模に8ガロンの相違があるということは、まるで国民の自由が侵害され、彼らの財産が損害を被り、その生活とは言わないまでも、人々の繁栄が終わってしまうかのように、その国であなた方が、いっせいに警鐘を鳴らすほどの、価値あることなのだろうか。

さらに、良質で健康によいスピリッツは、小規模な蒸留所ならともかく、大規模なそれでは製造できないというのは、確かな事実なのだろうか。

前者と後者との能力の間に横たわる大きな違いは、作業に必要とされる時間から生ずるのではないのか。

この法律が通過する前には、10ガロンを超える蒸留所で、自家用にスピリッツを合法的に造ることは、誰にもできなかったのだから、ただ規模を2ガロンまで縮小したところで、これまで人々が合法的にできたあらゆることが、今なら人々にできることになるのだろうか。より多くの時間を使って、ただ同量のスピリッツが製造できることになるだけではないのだろうか。

10ガロンの容量を持つ蒸留所で、100ガロンの能力のある蒸留所よりも良質のスピリッツができたというのが正しいからと言って、同じ諸原理にもとづいて、(作業に必要な時間とは関係なく)2ガロンの蒸留所なら、10ガロンの蒸留所よりも良質のスピリッツが造れる、と考えられるのだろうか。

蒸留所の規模が、わずかに10から2ガロンに縮小されたと言うので、現在あなた方は、議会に対して、声高な怒号や不平をもらしているが、それなら、あなた方自身であれ、あなた方の先祖であれ、自家用に認められた蒸留所の規模が、1760年に、20から10ガロンに縮小された場合に、同じことをしただろうか。

あなた方には、現在と同様に、当時にも、正当な理由が十分にあったのだから、あなた方自身が過去に口を閉ざしていたのなら、どんな強引な言い方をしても、あなた方が現在反対する

という法はないのではなかろうか。

この法律は、蒸留という仕事を、独占、つまり少数の大蒸留業者の手に投げ入れ、そのことによって、わが国の大麦の価格や価値を引き下げることになるという、あなた方の懸念は、十分根拠のあることなのか、それとも想像上のものなのだろうか。

議会の最近の法律などは、全く存在しなかったのに、今季には他の諸原因によって、(小麦等々のみならず) 大麦の現在の低価格が、発生したのではなかったのか。

それなら、あなた方がそこに求める原因とは関係なく、起こったはずの結果について、あなた方の国の法律のせいにするのは、公平で理にかなうことであろうか。

より多数の購買者たちが、みずからの製造品の材料を求めて市場にやってくる場合、それが交易における独占の兆候となるのだろうか。

取引する人たちの数が増加するのが、独占の兆候なのだろうか。そして、最近の法律によって、小規模な蒸留所が廃止、または制限された結果として、大多数の新たな蒸留業者たちが、最近様々な所に参入したというのは、疑いのない事実ではないのか。

もしも、気候の性質、国民の習慣、ないしは性向、あるいはその他の諸原因によって、精製^{スベリ}された^リリカーの一定量が、毎年スコットランドで製造され、必ず消費されるのであれば、民間の蒸留を禁止するものとして作用する最近の法律によって、同じ量が、最近参入した新たな蒸留業者たちによって、社会に供給されるという事態が、確実に起こるのではなかろうか。

それゆえ、麦芽の、したがって穀物の同じ量が、蒸留業にとって必要となり、その結果、使用されることになるのではないのか。

あなた方が、妥当な価格と信頼のおける支払いについて、いっそう安心ができるのは、50人の資力のある、旧知の蒸留業者たちからなのか、それとも、貯えもしばしば定まった住居も全然ない、1500人の乞食からなのだろうか。

まったく税を負担しない民間の蒸留業者が、全部ではないにしても、政府を支持するために支払いをする義務のある税の大部分を、少なくとも負担はしている、参入した蒸留業者を、はるかにしのいだり、あるいはそれと肩を並べたりすることが、奨励されるべきであるというの

が、はたして、筋が通っているとか、礼にかなっているとか考えられるのだろうか。

しかしながら、スピリッツの消費が、税の支払いやその価格の上昇のために、減少させられるようなことがあれば、その当然の帰結は、良質のエイルに対する需要が増大し、製造が行われるということにはならないのだろうか。また、これは、^{スピリチュアル}精製されたリカーを度を過ぎて摂取するよりも、国民の健康、道徳、そして平静さが、損なわれるのがはるかに少ない、わが国の大麦の有益な処理に向けたひとつの径路に、道を開くことにはならないのだろうか。

諸個人にとって、もしくは特定の所にとって、ある種の不都合や不利益を伴うことがない、交易の規制、あるいは収入の増加のための一般的法律のことを、あなたは耳にされたのであろうか。

しかし、このようなことが、そうした法律を撤回するための十分な理由なのだろうか。

あらゆる法律、およびあらゆる法案が適切であるかどうかは、そういう中途半端な考察によってではなく、その長所と短所とを双方から、公平で片寄りのない調和という観点から、審理され、決定されるべきではないのか。

あなた方は、現状に対して、この法律を、まじめに適用してみたことがあるのだろうか。……それなら、その結果はどうであろうか。

要するに、あなた方が真剣に考えているのは、スコットランドもしくは、あなた方の特定の州のために局部的な法律を獲得することなのか。そうでなければ、以上の質問を丹念に調査し、率直に返答した後で、あなた方が、それを求めるのが賢明ではないのだろうか。

1779年9月28日

B.

IV. 小 括

以上に紹介してきた2つの論説は、その提出された時間に前後があるにしても、いずれも現行法を前提として、大規模な蒸留所の立場に立って議論が展開されている点を共有していた。渡辺[1999]において紹介した、9月27日号における論説は、こうした弁護論をいわば集大成する形で、議論が展開されているとも考えられるので、次に検討される『クーラント』誌10月4日号における、反論を誘発したともみなせるのである。

10月4日号においては、現行法に反対する議論に水を差すという点では、共通しながらも、他方で、こうした一連の論説が否定している独占の可能性や、大規模な蒸留所の長所について、

独自の立場が展開されているのであるが、この点は続稿において検討を加えることにしたい。

参考文献

- Grant, W. & David D. Murison, (ed.) [1986], *The Compact Scottish National Dictionary*, Aberdeen.
- 渡辺邦博 [1999], 1799年のスコットランド蒸留業問題をめぐる若干の新聞記事について……晩年のジェイムズ・ステュアートと内国消費税問題……, 『産業と経済』14-2, 奈良産業大学経済経営学会。
- 渡辺邦博 [2000], 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』におけるJ.ステュアートの小論について, 『産業と経済』14-3/4合併号, 奥村茂次教授退任記念号, 奈良産業大学経済経営学会。